

万葉論

3章 第三卷

九州天皇家と近畿天皇家

追憶の歌人、山部赤人

万葉集第一巻・第二巻の編者は九州天皇家の各天皇の代にその代を象徴する歌を集めた。九州天皇家の倭(やまと)の天皇の代の歌、九州天皇家の近江の天皇の代の歌、天武の代に壬申の乱の歌、九州から奈良藤原京に遷都した持統の代の歌、そして近畿天皇家の代の歌と歴史を追って編纂した。その狙いは歴史の叙述にあったように見える。だが万葉編者の真実の意図は近畿天皇家の世の中にあつて忘れ去られていく九州天皇家の追憶とその鎮魂にあつた。第一巻の最終を飾る歌は長皇子の歌である。

寧楽宮

長皇子、志貴皇子と佐紀宮に俱に宴する歌 84

秋さらば 今も見るごと 妻戀ひに 鹿鳴かむ山そ 高野原の上

和銅三年、元明天皇は平城京の新しい皇居、寧楽宮に遷った。長皇子、志貴皇子が宴会した宮の名前は佐紀宮である。この宮は奈良市佐紀町にあつたと思われる。平城京完成によって近畿天皇家は京を構え、強力な統一中央集権国家となった。その輝かしい都の様子を思うと、長皇子の歌は地味である。歌に何か深い意味があるようには見えない。

今も鹿が見えるが、秋になったら、この高野原は妻を恋うて、鹿が鳴く山となるでしょう。

長皇子は天武の第四皇子である。志貴皇子は天智の皇子と解釈されている。それでは、平城京の宮で天武の皇子と天智の皇子が仲良く宴会していたのであろうか。そうではない。この志貴皇子とは天智の皇子ではない。長皇子と同じく、天武の皇子である。その母は九州天皇家の重臣の娘である。

万葉編者は万葉集第一巻の最後の歌として長皇子の歌を取り上げた。その題詞には志貴皇子と宴をした時の歌であるとわざわざ志貴皇子の名を載せた。この二人は九州天皇家の天武の血を引く最後の皇子である。二人の皇子の死を以て九州天皇家は歴史から消えた。万葉編者は長皇子の歌を最後に載せることによって九州天皇家への鎮魂歌としたのである。

天武の皇子は亡くなったが、近畿天皇家の中に九州天皇家縁の人々が生き続けたのは当然である。九州天皇家伝統の歌人として活躍した人々もいる。その歌人は九州を旅をして九州天皇家の追憶を歌った。その代表が山部赤人である。

伊豫の温泉の歌

山部宿禰赤人、伊予の温泉に至りて作る歌一首 322番

皇祖神の 神の命の 敷きいます 國のことごと 湯はしも さはにあれども 島山の宜しき國と
ごごしかも 伊豫の高嶺の 射狭庭の 丘に立たして 歌思ひ 辞思はししみ 湯の上の 木群
れを見れば 臣の木も 生ひ継ぎにけり 鳴く鳥の 声も変わらず 遠き代に 神さびゆかむ
行幸処

天皇家の祖先神、神の命が治めておられる國にはここそこに温泉は多くあるが、島の山が良い國である伊豫の高い嶺の射狭庭の丘に立って歌を思い、言葉をあれこれお考えになった温泉のほとりに群がった木々を見れば「臣の木」も生い茂っている。鳴く鳥の声も変わらず、この行幸された土地は後々の代にも神々しい姿であろう。

赤人は「皇祖神の神の命の敷きいます國」と歌っている。皇祖神とは天皇家の祖先神である。赤人は祖先神として天照大神を思ったのか、それとも、天照大神の父であり、國生みの功労者である伊邪那岐命を思ったかわからない。あるいは、もっともっと古い天之御中主神を想起したのかもしれない。いずれの祖先神でも構わないが、これらの天皇家の祖先が治めた國が伊豫である。天照大神が治めた國である伊豫、伊邪那岐命が治めた國である伊豫、天之御中主神が姿を現した伊豫。これらの天皇家祖先神が治めた國、伊豫とはどこか。愛媛県伊豫ではない。愛媛県伊豫はこれら天皇家祖先神と係わりはない。

伊邪那岐命、伊邪那美命は國生みで「伊豫二名島」を産んだ。伊豫二名島には四つの國があった。「伊豫」「讃岐」「粟」「土佐」である。赤人が詠んだ「伊豫」はこの伊豫である。天照大神は伊邪那岐命によって「高天原を治めよ」と命じられた。「高天原」とはその表記の如く、「高地の天(あま)の集落」という意味である。この弥生集落は「伊豫二名島」のすぐ隣の島に存在した。この島は後の代では「橋の島」とも呼ばれた。「橋」は「立ち鼻」で、島の形状は人間の鼻に似ている。

「天(あま)」の名前の由来は「天之御中主神」である。島にこの神が現れた。神の名をとって「天(あま)」と呼ばれようになった。天之御中主神が現れた島は天照大神が治めた高天原と同じである。

天皇家の祖先神、天之御中主神、伊邪那岐命、天照大神の歴史舞台は全て同じ場所である。「天(あま)」と呼ばれた弥生集落、伊豫、土佐、粟、讃岐と呼ばれた弥生集落が存在したのは天皇家の聖地、彦島である。幸い、伊豫風土記の一部が残っている。そのいくつかをみてみよう。

湯の郡

伊豫の國の風土記に曰はく、湯の郡。大穴持命、見て悔い恥じて、宿奈毗古那命を活かしまく欲して、大分の速見の湯を、下樋より持ち度り来て、宿奈毗古那命を漬し浴しかば、暫が間に活起りまして、居然しく詠して、「眞暫、寝ねつるかも」と曰りたまひて、踐み健びまし跡処、今も湯の中の石の上にあり。凡て、湯の貴く奇しきことは、神世の時のみにはあらず、今の世に疹病(やまひ)に染める萬生(ひとびと)、病を除やし、身を存つ要薬と為せり。……

伊豫國に温泉があったことを記している。出雲王朝の王、大穴持命(大国主命)は国土建設において共に苦労した宿奈毗古那命が病気になったとき、「大分の速見」の湯を持って帰り、その温泉の湯に入れたところ、回復したという説話の中に伊豫温泉が紹介されている。

古代出雲王朝の説話であるが、「大分の速見」とは現在の大分県ではない。九州天皇家における「大分」は小倉南区である。古代出雲王朝の都は小倉南区に存在した。小倉南区の「大分」にあった温泉の湯を彦島の「伊豫」の國に持ち帰った。それが「伊豫」の温泉の起源である。

この彦島伊豫の湯は現在枯れている。その原因は天武大地震である。「時に伊豫温泉没れて出でず。」と天武紀は記録している。天武の代の大地震は北九州を襲った大地震である。この時、九州天皇家の天皇、天武は太宰府にいた。

天山

伊予の國の風土記に曰わく、伊与の郡。郡家より東北のかたに天山(あめやま)あり。天山と名づくる由(ゆえ)は、倭(やまと)に天加俱山(あまのかぐやま)あり。天より天降(あも)りし時、二つに分かれて片端(かたはし)は倭の國に天降(あまくだ)り、片端は此の土(くに)に天降りき。因りて天山と謂う。本(ことのもと)なり。その御影は敬礼ひて久米らが奉れるとそ。

伊豫の國の天山(あめやま)の記録である。伊豫の郡の北東に「天山」がある。また倭(やまと)の國には「天加俱山(天香具山)」がある。伊豫の天山と倭の香具山はいわば兄弟である。

この天山の記録は赤人の歌と同調する。赤人は「島山の宜しき國と」詠った。伊豫を島と認識し、島は島山であると認識している。島山とは幾つも山がある島ではない。山が一つある島である。伊豫の國は天山という山がある島に存在した國である。この天山とは彦島老町の小戸山である。この山の絵図は久米氏が奉安していると伝えるように伊豫の國は久米氏の國であった。神武天皇が東征に出立するとき徴兵に応じた部族が久米氏であった。神武東征出立は吉備、彦島に存在した九州天皇家の吉備である。彦島の小戸山は久米一族の聖なる山であった。

神功皇后御歌

橘の島にし居れば河遠み曝さで縫ひし吾が下衣。此の歌、伊豫の國の風土記の如きは、息長足日女命の御歌なり。

同じ歌が万葉集巻7・1315にある。こちらには作歌者名はない。伊豫風土記では神功皇后の歌と明記されている。

橘の島にいるので、河が遠い。河の水にさらさないで、下着を縫ってしまったよ。

これは伊豫國風土記の記録である。その風土記に神功皇后がいる。神功は「橘の島にいるので」と詠っている。愛媛県伊豫で「橘の島」といわれる島は特定できない。この橘の島は愛媛県伊豫に存在した島ではない。九州天皇家の伊豫に存在した島である。九州天皇家の神功皇后がいた「橘の島」とは彦島老町の「老山公園」である。神功の夫、仲哀天皇は彦島八幡に祀られている。神功皇后が「橘の島」にいたのは、そこが自分の宮だったからである。



後の岡本の天皇の御歌

伊豫の國の風土記には、後の岡本の天皇の御歌に曰はく、みぎたづに泊てて見れば。云々

伊豫國風土記に後の岡本の天皇が歌がある。だが上の句だけである。天皇の名は「後の岡本の天皇」となっている。斉明天皇とは書かれていない。この天皇は九州天皇家の天皇である。九州天皇家の天皇が伊豫の國で、「伊豫の熟田津に泊ってみれば」と歌った。この伊豫は九州天皇家の伊豫、彦島である。万葉集には「後岡本宮の天皇の代」に、熟田津の歌がある。こちらの作歌者は額田王である。

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

額田王は後岡本宮の天皇と共に伊豫國に行った。そして熟田津に宿泊した。天皇は「熟田津に泊ってみれば」と詠い、額田王は「熟田津で船に乗ろうと、月の出を待っていれば」と詠った。どちらの歌も九州天皇家の天皇と九州天皇家の額田王の九州天皇家の「伊豫熟田津」の歌である。

伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覽し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり。

万葉集の後書きはこのように書いている。「伊予の熟田津の石湯の行宮」とは彦島にあった九州天皇家の温泉に作られた行宮である。

額田王の歌に「潮もかなひぬ」とある。これは潮の干満のことではない。彦島小戸に見られる特徴的な潮の流れをいう。関門海峡の潮流は古来、「難波」と恐れられた潮の流れである。この海峡は、昼夜四回、響灘と周防灘の水位の変化によって「西流」と「東流」に激しく潮の流れが変わる。その影響で彦島小戸もおよそ十一ノットの速さで潮が流れていた。「潮が適う」とは船出に都合のよい潮に変化したという意味である。

赤人の歌は九州天皇家追憶の歌

額田王の熟田津の歌からすでに60年以上経過した。もはや九州天皇家は存在しない。時代は近畿天皇家の代である。赤人は九州天皇家の聖地、彦島の伊豫を訪れ、この歌を詠んだ。歌は九州天皇家の追憶歌である。「遠き代に神さびゆかむ行幸処」と、遠い世まで神々しい姿を伝えていくであろうと願った九州天皇家の彦島の伊豫は今人々の記憶にはない。

反歌 323番

もしきの 大宮人の 熟田津に 船乗りけむ 年の知らなく

赤人の反歌は額田王の「熟田津に 船乗りせむと」を前提にした歌である。赤人の歌では船に乗り込んでるのは軍人ではなく「大宮人」である。これは戦闘のための乗船ではない。軍人が乗船していざ出陣という情景ではない。

額田王の熟田津の歌は662年白村江への出陣の歌と考える研究者がいる。しかし額田王の歌は唐と戦う日本軍の出陣の歌であると想定することができるであろうか。祖国興亡の一大決戦に出発する日本軍の司令官が詠った歌とするにはあまりにも緊張感に欠ける。唐は当時世界最強の軍事国家である。明日の希望のない戦いとなる。その司令官が温泉に入った。それはない。額田王の熟田津の乗船の歌は後岡本宮の天皇が九州天皇家伊豫國へただ行幸した時の歌である。

明日香の歌

神岳に登りて、山部宿禰赤人の作る歌一首324

三諸の神名備山に 五百枝さし 繁に生ひたる 梅の木 の いや継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく ありつ
も 止まず通はむ 明日香の 古き京師は 山高み 河雄大し 春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河し清け

し 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづはさわぐ 見るごとに 哭のみし泣かゆ 古思へば

「三諸の神名備山」が難解である。この山はどこかの山か。原文は「三諸乃神名備山」である。この漢字表記をそのままに尊重しよう。意味は「三つの諸々の神の名を備えた山」となる。古来、神の山として有名なのは太宰府の鬼門を守る宝満山である。持統が天武の追憶の中で「神岳の黄葉」を詠って有名である。だが赤人の歌はその宝満山ではない。「三諸」と詠う。「三諸」を「御諸」と意識してはならない。「三」は文字通り「三」である。三つの神の名前が備わる山とはどの山か。

この歌にふさわしい山がある。中大兄の歌に詠われた倭三山である。倭三山とは「高山」「雲根火」「耳梨」である。真ん中の山は「雲根火」で、この山頂には男神が祀られている。南北の「高山(香具山)」と「耳梨」には女神が祀られている。神が祀られた三山とは香春岳である。赤人が詠った「三諸神名備山」とは香春一の岳、二の岳、三の岳である。

大意

神の名前が備わった明日香の三つの山にはたくさんの木々の枝が生い茂っている。生い茂った梅の木の名前の如く、次々と、また、玉葛のように、長く、絶えることなく、常に訪れようと思う明日香の旧い都は、山は高く、河は雄大に流れる。春の日は山を見るのがよい。秋の夜の河は清く流れ、朝雲の中を、鶴が乱れ飛び、夕霧の中を、かわずが騒ぐ。見る度に涙が溢れて泣けてくる。古を思えば。

赤人はなぜ泣いたのであろうか。もし、明日香が奈良の明日香であるとして、赤人はなぜ奈良明日香を見て、こんなにも泣いたのであろうか。なるほど、赤人の時代には都は明日香から平城京に遷っている。明日香はすでに寂れていたことであろう。だが、それが理由で泣くであろうか。都が遷れば明日香の地は寂れて当然である。確かに、明日香は寂れたが、新しい都の平城京は咲く花の匂うが如く輝いているではないか。近畿王朝人として、明日香の衰退は寂しいことであろうが、平城京の栄華と繁栄を思えば泣くことではない。

赤人が歌った明日香は奈良明日香ではない。「三諸の神名備山」が存在した九州天皇家の旧き都、田川市の明日香である。天武天皇が即位した「飛鳥浄御原宮」があった飛鳥である。

山高み 河雄大し 春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河し清けし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづはさわぐ

このように詠われた美しい自然は田川市の自然である。詠われた川は田川市を貫流する彦山川である。

見るごとに 哭のみし泣かゆ 古思へば

九州天皇家の縁の歌人、赤人は「古(いにしへ)」を思いだして泣いた。「いにしへ」とは九州天皇家の代を意味する。近畿天皇家の世から見れば、九州天皇家は「古(いにしへ)」である。すでに過ぎ去った、すでに消えてしまった代である。この「古」の用法は人麿以来一貫している。

淡海の海 夕波 千鳥 汝が鳴けば 情もしぬに 古思ほゆ (柿本人麿 266番)
古の人に われあれや ささなみの 故き京を 見れば悲しき (高市古人 82番)

人麿は九州天皇家の歌人であった。淡海とは九州天皇家の都があった近江(小倉南区曾根)の海である。持統の遷居と共に九州天皇家は奈良に遷った。都があった近江はもはや見る影もない。だが夕方になれば、周防灘から波が干潟を遡上してくる。その波を受けて、干潟では千鳥が鳴く。そのような情景は昔と変わらない。その鳴き声を聞くと華やかだった「古(いにしへ)」が思い出されてくることである。「古」とは単に昔という意味ではない。「九州天皇家の代」という具体的な時代をさす用語である。

高市古人は「古の人にわれあれや」と歌い出している。古人も「古」に具体的な意味を込めている。

私は九州天皇家の人間ではないが、だが荒れはてた九州天皇家の旧い都を見れば、人麿と同じように悲しいことである。

赤人は九州天皇家の明日香、田川市を訪れた。ここは天武の代まで九州天皇家の都であった。山は高く、川は美しく流れている。春の日の山は青々とすばらしい。秋の夜は川が清い。美しい自然は変わらないが、もうここに天皇家は存在しない。九州天皇家は持統の時に奈良に遷り、そして九州天皇家は消えてしまった。消えていった九州天皇家の代のことを思い出せば泣けてしまう。

反歌 325

明日香河 川淀さらず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 戀にあらなくに

明日香川の川淀にはいつも霧が立っている。その霧はすぐに消えていくが、私の明日香への思慕は霧のように、心から消え去っていくようなものではない。



(charider.cside2.com/Nonbiri/genryu/.../hikosangawa.htm)

近畿天皇家において九州天皇家出身の人々は故郷、九州を忘れなかった。赤人もその一人である。彼は幼い頃を九州で過ごし、九州天皇家の栄光を知っていた。

赤人は九州天皇家の旧都を訪ね、涙を流し、九州天皇家の追憶の歌を詠んだ。赤人は万葉編纂者の心を知っていたのである。